# 前置詞句の構造と疑似受動文について

本田隆裕 (Takahiro Honda) e-mail: hondat33@gmail.com 大阪大学大学院文学研究科

### 1. 序

- ・以下のような例を疑似受動文と言う。
  - (1) This bed was slept in (by Obama).
- ・ただし、(2)のような文は容認されない。
  - (2) a. \*The tree was sat under/beside/in by Bernie.
    - b. \*The station was arrived at (by Obama).
    - c. \*Tuesday was departed on by Bill.

((a, c) C&J (Culicover and Jackendoff (2005)): 207)

- 2. 再分析(Reanalysis)とその問題点
  - ・H&W (Hornstein and Weinberg (1981))は、動詞とそれに隣接する前置詞を結合し、一つの複合動詞を形成する再分析(Reanalysis)を提案
  - ・しかし、(3)のように動詞と併合されない前置詞句においても、前置詞 P はその補部 DP に格を与える。
    - (3) a book about Chomsky

PとDPが併合(merge)された段階でDPは格を付与されている。 再分析が成立するためには、D構造やS構造を仮定しなければならない。

- 3. 「特徴づけ」という概念
  - ・Takami (1992), 高見 (1995)
    - (4) 英語の疑似受身文は、主語がその受身文によって特徴づけられている場合に適格となる。

(高見 (1995: 59))

- ・ただし、なぜ疑似受動文が英語など一部の言語でのみ可能なのか明確にされていない。
- 4. 本発表の目的

Takami (1992), 高見 (1995)の「特徴づけ」の考え方を統語論の枠組みで捉え直し、疑似受動文についての分析を新たに提案する。

### 5. 提案

・Svenonius (2003)は Talmy (1978)に基づいて、前置詞も他動詞と同様、外項(Figure)と内項(Ground)を取ると主張した。

"...the Figure is the entity in motion or at rest which is located with respect to the Ground ..."

(Svenonius (2003: 432))

- ・疑似受動文が存在する言語では、(5)-(7)に示す3タイプの前置詞句が存在する。
  - (5)  $[_{p*P}$  Figure  $[p*[_{PP} P Ground]]]$
  - (6)  $[_{pP} p [_{PP} P Ground]]$
  - (7) [POBLP POBL DP]
- · Chomsky (2001)

他動詞句: $[v^*]$  外項  $[v^*]$  [ver  $[v^*]$  [ver  $[v^*]$ ]] = (strong) phase

非対格動詞句: [vP V [vP V 内項]] (strong) phase

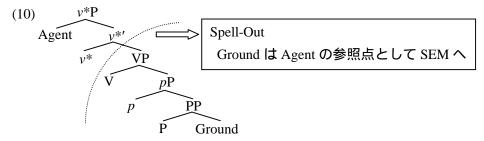
- ・ $\nu^*P$  と  $\nu$ P の関係が、(5)の  $p^*P$  と(6)の pP と同様であると仮定する。
  - (5)  $[_{p*P}$  Figure  $[p*[_{PP} P Ground]]] = (strong) phase$
  - (6)  $[_{pP} p [_{PP} P Ground]]$  (strong) phase
- ・p\*P / pP 内の P 自体は DP に格を付与せず、p\*が v\*と同様に probe として機能して goal に対格を付与。
- ・(6)の Ground は pP の外の probe によって格が付与される。
- P は、*p\**, *p* に付加する。(see Svenonius (2003))
- ・Svenonius (2003)によれば、Ground は何らかの要素の参照点として機能する。
  - (5)の Ground ・・・ Figure の参照点
  - (6)の Ground ・・・ pP の外の要素(e.g. 動詞の Agent)の参照点

#### 6. 分析

- ・Takami (1992)の分析に従えば、(1)の this bed は Obama が眠ったという事象によって特徴づけられている。
  - (1) This bed was slept in (by Obama).
- ・なぜ(8)の Boston は同じ事象によって特徴づけられないのか?
  - (8) a. Obama slept in Boston.
    - b. \*Boston was slept in by Obama.
- ・(8)の Boston は、「眠る」という事象とは直接関係なく、Obama の存在地点を指しているだけ。
  - ・(8)の Boston は Obama という Figure の参照点として解釈される。



・(1)の this bed は Obama という sleep の Agent の参照点として解釈される。



- ・Figure は前置詞の外項(動詞の外項ではない)
- ・Figure の参照点は、疑似受動文によって特徴づけられない。
  - (8b)の Boston は Figure の参照点であり、疑似受動文によって特徴づけられない。
- ・動詞の外項である Agent の参照点は、疑似受動文によって特徴づけられる。
  - (1)の this bed は Agent の参照点であり、疑似受動文によって特徴づけられる。

## 7. 統語構造

- ・(1)の this bed を含む前置詞句は Figure を外項として投射しない。 (6)の構造
- ・(8)の Boston を含む前置詞句は Figure を外項として投射する。 (5)の構造
- ・藤田・松本 (2005): 非能格動詞文の軽動詞は、他動詞と同様に v\*。
- ・(1)に対する能動文(11)は、(12)のような構造である。

<sup>1</sup> Chomsky (2001)とフレームワークは若干異なるが、Pesetsky and Torrego (2004)でも対格を付与する P と付与しない P (defective preposition)の二種類の P が仮定されており、後者のみ疑似受動文が可能であるという考え方が示されている。

- (11) Obama slept in this bed.
- (12)  $\left[ \operatorname{CP} C \left[ \operatorname{TP} \operatorname{Obama}_{k} \left[ \operatorname{T} \left[ v^{*P} t_{k} \left[ \operatorname{sleep}_{j} + v^{*} \left[ \operatorname{VP} t_{j} \left[ p^{P} \operatorname{in}_{i} + p \left[ p^{P} t_{i} \right] this \right] \right] \right] \right] \right] \right]$ 
  - $\cdot p$  は probe ではないので、this bed は  $v^*$ と一致して対格が付与される。 $^2$
- (13)  $\left[ \operatorname{CP} C \left[ \operatorname{TP} \operatorname{Obama}_{k} \left[ T \left[ v^{*P} t_{k} \left[ \operatorname{sleep}_{j} + v^{*} \left[ \operatorname{VP} t_{j} \left[ p_{P} \operatorname{in}_{i} + p \left[ \operatorname{PP} t_{i} \operatorname{this} \operatorname{bed} \right] \right] \right] \right] \right] \right] \right]$
- ・Chomsky (2001)によれば、受動文の軽動詞は v であり、(1)の派生は(14)のようになる。<sup>3</sup>
  - (1) This bed was slept in (by Obama).
  - (14)  $\left[ \operatorname{CP} C \right]_{TP}$  this bed<sub>i</sub>  $\left[ \operatorname{T-was} \left[ \operatorname{vP} \operatorname{sleep}_k + v \left[ \operatorname{vP} t_k \left[ \operatorname{pP} \operatorname{in}_j + p \left[ \operatorname{PP} t_j t_i \right] \right] \right] \right] \right]$ 
    - ・this bed は T と同じ phase 内にあり、T にとってアクセス可能で一致できる。
- ・一方、(8a)は(15)のような派生であると仮定する。4
  - (8) a. Obama slept in Boston.
  - $(15) \quad \left[ \underset{\text{CP C}}{\text{Cr}} \left[ \underset{\text{DP Obama}_{j}}{\text{Dama}_{j}} \right] \left[ \underset{\text{Tr}}{\text{Tr}} \left[ \underset{\text{v*P }}{\text{tl}} \left[ \underset{\text{Sleep}_{k}}{\text{sleep}_{k}} + \nu^{*} \left[ \underset{\text{p*P PRO}_{j}}{\text{tr}} \left[ \underset{\text{in}_{i}}{\text{hr}} + p^{*} \left[ \underset{\text{PP }}{\text{tr}} \left[ \underset{\text{Boston}}{\text{Boston}} \right] \right] \right] \right] \right] \right]$ 
    - ・Boston は Obama の存在地点を指しているだけ。
      Obama にコントロールされる PRO が Figure として投射される。
    - ・Boston は p\*と一致し、対格を付与される。
- ・(8b)の派生は、(16)のようになる。
  - (16)  $\left[\operatorname{CP} C\left[\operatorname{TP}\left[\operatorname{T-was}\left[v_{P} \operatorname{sleep}_{j} + v\left[v_{P} t_{j}\left[p_{*P} \operatorname{PRO}\left[\operatorname{in}_{i} + p^{*}\left[p_{P} t_{i} \operatorname{Boston}\right]\right]\right]\right]\right]\right]\right]\right]$ 
    - ・*Boston* は *p\**P phase 内にあり、フェイズ不可侵条件(Phase-Impenetrability Condition)により T にとってアクセス不可能である。
- ・C&J は、(2a)の前置詞句は動詞の項であるが前置詞の選択が比較的自由であると主張している。
  - ・the tree は、sit の Agent の参照点として機能しているのではなく、単に Bernie という実体との空間配置関係を述べるための参照点として機能している。

Bernie にコントロールされる PRO が Figure として投射される。 (17)

(17)  $\left[ \operatorname{CP} C \left[ \operatorname{TP} \left[ \operatorname{T-was} \left[ v_{P} \operatorname{sit}_{j} + v \left[ v_{P} t_{j} \left[ p^{*P} \operatorname{PRO} \left[ \operatorname{under/beside/in}_{i} + p^{*} \left[ p_{P} t_{i} \operatorname{the tree} \right] \right] \right] \right] \right] \right] \right]$ 

受動化によって特徴づけられる前置詞句の補部

動詞の外項の参照点

Figure が投射されない。

phase ではない。<sup>5</sup>

受動化によって特徴づけられない前置詞句の補部

Figure の参照点

phase である。6

- ・Figure が投射され得ない場合は、文脈によらず必ず疑似受動文が可能。
  - (18) Bill was laughed at (by John).

 $^2$  非能格動詞は同族目的語を補部に取り得るが、その場合でも前置詞の補部は  $\nu^*$ と同じ phase 内にあるので、Hiraiwa (2005)の Multiple Agree を採用すれば、同族目的語と同時に前置詞の補部も  $\nu^*$ と一致すると説明できる。

(i)  $\left[ \underset{\text{CP}}{\text{CP}} \text{ C} \right]_{\text{TP}} \text{ this bed}_{i} \left[ \underset{\text{T'}}{\text{T-was}} \left[ \underset{v^{*P}}{t_{i}} \right]_{v^{*'}} \text{ IMP} \left[ \underset{v^{*'}}{\text{sleep}_{k}} + -\text{en}_{l} + v^{*} \left[ \underset{\text{VoiceP}}{\text{voiceP}} t_{l} \left[ \underset{\text{VP}}{\text{v}} t_{k} \left[ \underset{pP}{\text{in}_{j}} + p \left[ \underset{PP}{\text{pp}} t_{j} t_{i} \right] \right] \right] \right] \right]$ 

 $<sup>^3</sup>$  Honda (to appear)では、受動文の軽動詞は  $v^*$ であると提案している。その分析に従えば、(14)の派生は、次のようになる:

 $<sup>^4</sup>$  PRO が不定詞や動名詞の主語以外の位置に現れる分析は、Takano (2003)でもなされている。

<sup>&</sup>lt;sup>5</sup> (1)の this bed が sleep の Agent の参照点として解釈されない文脈では、Figure が投射され、疑似受動文が不可能になると予想される。

<sup>&</sup>lt;sup>6</sup> (2a)の the tree が sit の Agent の参照点として解釈される文脈では、Figure が投射されず、疑似受動文が可能になると予想される。

- 8. 非対格動詞の疑似受動化
  - ・藤田・松本 (2005)によれば、外項役割と内項への格標示能力を欠く非対格動詞は受動化一般が阻まれる。 $^7$  (19)の arrive は、(20)の非文法性から非対格動詞ではないと考えられる。
    - (19) The solution was arrived at. (H&W: 86)
    - (20) \*There arrived a man at the solution. (Honda (to appear))
- 9. 付加詞の前置詞句
  - ・C&J によれば、(2c)の前置詞句は付加詞である。
    - (2) c. \*Tuesday was departed on by Bill.
  - ・(2c)の前置詞句は如何なる要素の参照点も表しておらず、(7)の構造をしている。
    - (7) [POBLP POBL DP]

補部 DP は、POBLによって内在格を付与される。

- ・(2c)が非文法的なのは、(i) Tuesday が内在格を付与されており、(ii) 付加詞は primary plane とは別の plane にあり、T と一致できないからである。(see Chomsky (2004))
- 10. 疑似受動文が不可能な言語の前置詞句
  - ・疑似受動文が不可能なフランス語等の言語では、全ての前置詞がその補部に内在格を付与しており、Pの代わりに  $P_{OBL}$  のみが存在している。 $^8$
  - ・そのような言語では、(5),(6)の前置詞句はそれぞれ(21),(22)のような構造になっている。
    - (21)  $[_{p*P}$  Figure  $[p*[_{POBLP} P_{OBL} Ground]]]$
    - (22)  $[_{pP} p [_{POBLP} P_{OBL} Ground]]$

(21)のp\*は Figure を投射するだけで格付与能力を持たないと考えられる。

・そのような言語では、Tと前置詞の補部 DP が一致することはない。

## 参考文献

Chomsky, N. (2001) "Derivation by Phase," In M. Kenstowicz, ed., Ken Hale: A Life in Language, 1–52 (MIT).

Chomsky, N. (2004) "Beyond Explanatory Adequacy," In A. Belletti, ed., Structures and Beyond, 104–131 (Oxford).

Culicover, P. and R. Jackendoff (2005) Simpler Syntax (Oxford).

藤田耕司・松本マスミ (2005) 『語彙範疇 (I) 動詞』(研究社).

Hiraiwa, K. (2005) Dimensions of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture, Doctoral dissertation, MIT.

Honda, T. (to appear) "Accusative Case in the Passive," English Linguistics 26: 33–66.

Hornstein, N. and A. Weinberg (1981) "Case Theory and Preposition Stranding," Linguistic Inquiry 12: 55–91.

Kayne, R. (1981) "On Certain Differences between French and English," Linguistic Inquiry 12: 349–371.

Pesetsky, D. and E. Torrego (2004) "Tense, Case, and the Nature of Syntactic Categories," In J. Guéron and J. Lecarme eds., *The Syntax of Time*, 495–537 (MIT).

Svenonius, P. (2003) "Limits on P: filling in holes vs. falling in holes," Nordlyd 31, No. 2: 431–445.

Takami, K. (1992) Preposition Stranding: From Syntactic to Functional Analyses (Mouton de Gruyter).

高見健一(1995)『機能的構文論による日英語比較 - 受身文、後置文の分析 - 』(くろしお出版).

Takano, Y. (2003) "Nominative Objects in Japanese Complex Predicate Constructions: A Prolepsis Analysis," *Natural Language and Linguistic Theory* 21: 779–834.

Talmy, L. (1978) "Figure and Ground in Complex Sentences," In J. Greenberg, ed., *Universals of Human Language*, 625–649 (Stanford).

 $<sup>^7</sup>$  非対格動詞文の前置詞句においては、(i)のように非対格動詞の内項にコントロールされる PRO が Figure として投射されていると考えられ、前置詞の補部は pstによって対格が付与されている:

<sup>(</sup>i)  $[_{CP} C [_{TP} Obama_i [_{T'} T [_{\nu P} \nu [_{VP} [t_i]_i [_{V'} arrive [_{p*P} PRO_i [_{p*'} p* [_{PP} at the station]]]]]]]]]]$ 

<sup>&</sup>lt;sup>8</sup> 英語とフランス語で前置詞の性質が異なることは既に Kayne (1981)が指摘している。